

ロッシーニ 《テーティとペレーオの結婚》 作品解説 水谷 彰良

初出は『ロッシーニアーナ』第21号(2001年)所収の拙稿『ロッシーニ全作品事典(16) 第II部門:劇音楽とカンタータより4作品』。図版を加えた増補改訂稿を決定版としてHPに掲載します。(2012年10月)

題名 《テーティとペレーオの結婚 (*Le nozze di Teti,e di Peleo*)》

ジャンル アツィオーネ・コーロ=ドランマーティカ (Azione coro-drammatica) [舞台合唱劇。実質的には舞台形式のカンタータ]

作曲 1816年 [3月末~4月]

台本 アンジェロ・マリーア・リッチ (Angelo Maria Ricci,1776-1850) イタリア語

初演 1816年4月24日(水曜日)ナポリ、フォンド劇場 (Teatro del Fondo)

人物 ①ジョーヴェ Giove [ユーピテル Jup[iter]] (テノール) 註:ローマの神界の主神。
②チェーレレ Cerere [ケレス Ceres] (ソプラノ) 註:古代ローマ神話の豊穡の女神。
③テーティ Teti [テティス Thetis] (ソプラノ) 註:海の女神でゼウスやポセイドンから妻に望まれたが、ペレーウスと結婚してアキレウスを産む。
④ペレーオ Peleo [ペーレウス Peleus] (テノール) 註:最初の妻アンティゴネーの死後、海の女神テティスを娶り、神々の祝福を受ける。
⑤ジュノーネ Giunone [ユノーネ Juno] (ソプラノ) 註:古代ローマ神話最大の女神で結婚生活の保護神。ユーピテルの妻。

初演者 ①アンドレア・ノッツァーリ (Andrea Nozzari,1775-1832)
②イザベッラ・コルブラン (Isabella Colbran,1784-1845)
③マルゲリータ・シャブラン (Margherita Chabrand,1790頃-1821以降)
④ジョヴァンニ・ダヴィド (Giovanni David,1790-1864)
⑤ジローラマ・ダルダネッリ (Girolama Dardanelli,?-?)

編成 独唱 (3ソプラノ、2テノール)、合唱 (ソプラノ I・II、テノール I・II、バス)、管弦楽 (フルート2/ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ホルン2、トランペット2、ファゴット2、トロンボーン2、ティンパノ [註]、弦楽合奏)
註:一対のティンパニではなく一つなので単数形となる。N.6のみ使用。

構成 (全集版による)

前奏曲 (Preludio) (変ホ長調、4分の4拍子、アンダンティーノ~4分の2拍子、アレグレット)

N.1 合唱 (山よ鳴れ、野原よ響け *Suoni il monte,eccheggi il piano*) (合唱)

— 合唱の後のレチタティーヴォ (おお、何とゆっくりとその瞬間が来るのか *Oh come lento giunge un momento*) (ペレーオ)

N.2 ペレーオのカヴァティーナ (正義の神よ、私の願いを *Giusto cielo, i voti miei*) (ペレーオ、男声合唱)

— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ (アカストの息子は *Figlio d'Acasto*) (テーティ)

N.3 二重唱 (あなたの傍らで変わることなく *Costante al tuo fianco*) (テーティ、ペレーオ)

N.4 小合唱 (森の奥底まで *Fin del bosco*) (テーティ、ペレーオ、合唱)

— 小合唱の後のレチタティーヴォ (神々よ、天界からあなたがたと共に *Numi, fra voi dall'etra*) (ジョーヴェ)

N.5 合唱 (ああ、お出てください: イメーネ [婚礼の神] の祭壇には *Deh venite: Sull' ara d'Imene*) (合唱)

N.6 三重唱 (私のためについに平和が続べたまい *Per me regni alfin la Pace*) (テーティ、ペレーオ、ジョーヴェ)

— 三重唱の後のレチタティーヴォ (蒼白なオルコ [オルクス] もむなしく *Invan del pallid'Orco*) (ジョーヴェ)

N.7 合唱 (ああ、お出てください: イメーネの祭壇には *Deh venite: Sull' ara d'Imene*) (合唱)

N.8 二重唱 (誰が私にバラと百合をもたらし *Chi mi reca le rose ed i gigli*) (チェーレレ、ジュノーネ)

— 二重唱の後のレチタティーヴォ (それゆえたくさんのことを *Tanto può dunque*) (テーティ、チェーレレ、ペレーオ)

N.9 チェーレレのアリア (ああ、彼女たちは逆らえぬ *Ah non potrian resistere*) (チェーレレ、合唱)

— アリアの後のレチタティーヴォ (お聞きなさい、おお民よ *M'udite o genti...*) (ジョーヴェ)

N.10 合唱 (この山原に喜びの踊りが *Liete danze per queste pendici*) (合唱)

N.11 フィナーレ (アウソニアの地に聖なる百合 [註:ブルボン家の象徴] が見られよう *Sacro ad Ausonia vedrassi il Giglio*) (テーティ、チェーレレ、ジュノーネ、ペレーオ、ジョーヴェ、合唱)

演奏時間 約 50 分

自筆楽譜 ナポリ、サン・ピエートロ・ア・マイエツラ音楽院図書館

初版楽譜 次の全集版

全集版 II/3 (Guido Johannes Joerg 校訂) Fondazione Rossini, Pesaro, 1993.

解説

ロッシーニがナポリに移って発表したカンタータ 2 作目の《テーティとペレーオの結婚》は、印刷台本で「アツィオーネ・コーロニドランマーティカ（舞台合唱劇）」と称されている。初演は前作《畏れおおくも我らがフェルディナンド 4 世国王陛下のめでたき誕生日のために》(*Pel faustissimo giorno natalizio di Sua Maestà il re Ferdinando IV, Nostro augusto sovrano*) [通称: ジュノーネ *Giunone*] (1816 年 1 月 12 日) から 3 ヶ月後であるが、ロッシーニはその間にローマで《セビーリヤの理髪師》を初演(アルジェンティーナ劇場、2 月 20 日) するなど多忙をきわめていた。

本作は、ナポリ王フェルディナンド 4 世 (1751-1825) の姪でオーストリア皇帝フランツ 1 世の娘マリーア・カロリーナ・フェルディナンダ・ルイージア (Maria Carolina Ferdinanda Luigia, 1798-1870) とシャルル＝フェルディナン王子ベリー公 (Charles-Ferdinand, il Duca Berry, 1778-1820) との結婚祝賀カンタータである。ベリー公はルイ 16 世の末弟で後にシャルル 10 世となるアルトワ伯の次男で、カロリーナとの婚姻はナポレオン戦争後のヨーロッパにおいて各国の王政が血縁による結び付きを強化する目的を担っていた¹。

台本作者アンジェロ・マリーア・リッチ (Angelo Maria Ricci, 1776-1850) は前記《畏れおおくも我らがフェルディナンド 4 世国王陛下のめでたき誕生日のために》のテキストを書いた詩人で、《テーティとペレーオの結婚》は舞台上演する作品として構想されている。題材はギリシャ神話のテティスとペーレウスの結婚から採られ、海の女神テティスがゼウスやポセイドンの求婚を退けて人間の英雄ペーレウスと結婚、二人の間にアキレウスが誕生することから婚礼祝いにふさわしい内容とされ、かつてモンテヴェルディも同題のオペラに着手しようとした (フェルディナンド・ゴンザーガとカテリーナ・デ・メディチの婚礼祝賀用。未完作品)。その後もフランチェスコ・カヴァッリによる同題のオペラ・シェーニカ (1639 年) その他の作曲例があるが、本作では第 8 曲以降のテキストにブルボン王家を象徴する「百合」を用い、隠喩によってオーストリア、フランス、ナポリ三王家の幸福な結び付きが祈念されている——「百合から百合へと希望がヨーロッパの名誉となって咲き栄えん」(N.10)。「エトナの国より出でし、もう一人のテティデ [テーティ] が、もう一人のペレーオとの新床を王家の地に花で飾らんことを」(N.11)。

作曲は台本が検閲局に提出された 3 月 30 日前後に始まったらしく、ロッシーニは母アンナに宛てた 4 月 16 日付の手紙に、「ぼくは [王子 (註: ロッシーニは *principe* と書いた後に抹消)] のためのカンタータを作曲しました。来週の月曜日に行われる王子の実際の結婚式でそれが演奏されるでしょう。詩がとても優雅で音楽もそれを模している、うまく行くよう願っています」と記した²。カロリーナとベリー公は 4 月 15 日に結婚契約を結び、《テーティとペレーオの結婚》の初演も当初その日に予定されていたが、なんらかの事情で見送られ、実際の結婚式が執り行われた 24 日に初演された。ロッシーニは最初の予定に間に合わせようとしたらしく、自筆楽譜には書き急いだ痕があり、筆写者の手で書かれた楽曲もある (N.2 ペレーオのアリアは《シジスモンド》からの筆写、N.7 合唱は N.5 の筆写、レチタティーヴォの一部は筆写者もしくは第三者による作曲を筆写したもの)。

サン・カルロ劇場が 2 月 13 日の火災で焼失したため、4 月 24 日の初演はナポリのもう一つの王立劇場であるフォンド劇場 (テアトロ・デル・フォンド) で行なわれた。初演歌手はいずれもサン・カルロ劇場のメンバーで、コルブラン、ノッツァーリ、ダルダネッリの 3 人は前年《イングランド女王エリザベッタ》を初演している。上演の詳細は知りえないが、全集版校訂者ガイド・ヨハネス・イェルク (Guido Johannes Joerg) は《テーティとペレーオの結婚》が舞台を使い、パントマイムと振付けを伴って上演されたと推測し (但し、無言劇のための音楽は喪失)、ガレンベルク伯爵ヴェンツェル・ローベルト (Wenzel Robert, Graf von Gallenberg, 1783-1839) 作曲のバレエ (題名不詳) も併演されている。この祝賀公演にかかった費用の総額は約 1718 ドゥカートで、ロッシーニと台本作者リッチはそれぞれ 150 ドゥカートの報酬を得た³。初演翌日の地方紙は、簡潔にこう報じている——「聴衆は、この劇の作者である令名高き騎士リッチ氏が我らの王女とフランスの王子の結婚を祝うためにテーティとペレーオの結婚から引き出した幸せな隠喩のすべてを理解した」⁴。

本作はロッシーニの他のカンタータと同様に旧作の転用や主題借用で成立しており、その幾つかは後のオペラに再使用されている。それゆえ現代のロッシーニ・ファンにはどの曲も耳馴染みがあり、オペラの選曲集のように感じられるだろう (そうした聴かれ方をロッシーニは予想しなかったが)。中でも印象的で意義深いのが、《セビーリヤの理髪師》第 2 幕の伯爵のアリア〈もう逆らうのをやめろ (*Cessa di più resistere*)〉をソプラノ用に移調したチェレレのアリア〈ああ、彼女たちは逆らえぬ (*Ah non potrian resistere*)〉(N.9) で、その後ロッシーニは《ラ・チェネレントラ》のロンド・フィナーレに改作している⁵。

《テーティとペレーオの結婚》における旧作の転用と主題借用、後の改作転用の原曲を簡略にまとめておこう
〔→〕内は後の作品への転用) 6。

- 前奏曲 アレグレット主題——《試金石》(1812年) 第2幕導入曲の主題〈Io del credito in sostanza〉
- N.1 合唱の主部〔→《泥棒かささぎ》(1817年)の合唱とジャンネットのカヴァティーナ〈Ma quel suono!〉〕
合唱の後のレチタティーヴォとN.2 ペレーオのカヴァティーナ——《シジスモンド》(1814年) ラディスラオの
シェーナとカヴァティーナ〈Misero me!〉〈Giusto ciel che i mali miei〉〔→《アディーナ》(1818年)のレチ
タティーヴォ〈S'alza la notte〉とマエストーゾ〈Giusto ciel che i dubbi miei〉但し《シジスモンド》からの直接転用〕
- N.3 二重唱の重唱部分——《トルヴァルドとドルリスカ》(1815年)の小二重唱〈Quest'ultimo addio〉及び室
内二重唱曲〈Amore mi assistì〉(1815年頃)
- N.4 小合唱の主題——テノールのためのアリア〈Dolci aurette che spirate〉導入曲の器楽伴奏部、《ひどい誤
解》(1811年)の合唱〈Oh come tacita〉、《バビロニアのチーロ》(1812年)の合唱〈Veh come pallido〉④
《トルヴァルドとドルリスカ》シェーナとトルヴァルドのカヴァティーナ導入部分の器楽伴奏部
- N.5 とN.7 合唱の開始部主題——《セビーリヤの理髪師》(1816年)の三重唱終結部〈Zitti, zitti, piano, pian
〔合唱の終結部→《ラ・チェネレントラ》(1817年)第2幕フィナーレ前の合唱〈Della Fortuna instabile〉〕
- N.6 三重唱のアンダンティーノ開始部——《試金石》の三重唱〈Prima fra voi coll'armi〉、同カノン、《トルヴ
アルドとドルリスカ》の三重唱〈Ah qual raggio di speranza〉、同カバレッタ主題、《パルミラのアウレリ
アーノ》(1813年)の三重唱〈Mille sospiri e lagrime〉〔カバレッタ主題→《アルミーダ》(1817年)の三重唱
カバレッタ〈Unitevi a gara〉、《銀行家アグアードの子息の洗礼式のためのカンタータ》(1827年)終結部〈Congiunti ed
amici〉〕
- N.8 二重唱の第一部分——《トルヴァルドとドルリスカ》第1幕導入曲の公爵登場の歌〈Dunque invano i
perigli〉〔→《泥棒かささぎ》ペーザロ再演(1818年)のための追加カヴァティーナ。《トルヴァルドとドルリスカ》
からの直接転用〕
- N.9 チェーレのアリア——《セビーリヤの理髪師》第2幕の伯爵のアリア〈Cessa di più resistere〉
〔アレグロ部→《ラ・チェネレントラ》ロンド・フィナーレのアレグロ〈Non più mesta〉《セビーリヤの理髪師》伯爵
のアリアの改作転用〕
- N.10 合唱の主要素材——《イタリアのトルコ人》(1814年)導入曲〈Nostra patria è il mondo intero〉。主題
は《バビロニアのチーロ》第2幕導入曲と《絹のはしご》(1812年)ルチッラのアリアに遡る。
- N.11 フィナーレのマエストーゾ主題——《セビーリヤの理髪師》第1幕フィナーレのアンダンテ〈Freddo ed
immobile〉、アレグロ主題——《絹のはしご》四重唱のアレグロ〈I voti unanimi〉、《トルヴァルドとドル
リスカ》第2幕フィナーレのブリランテ〈Ah dal contento〉

ロッシーニの天才が横溢する《セビーリヤの理髪師》の直後だけに、《テーティとペレーオの結婚》は彼のカン
タータの中でも無駄のない、音楽的に充実した作品に仕上がっている。神話を題材とするテキストゆえ歌詞の内
容とオペラティックな音楽との間には乖離があるが、聴き手は音楽と歌の魅力に惹きつけられ、そのことに気づ
かない。本作の魅力はコンサート形式でも十分に理解されると思うが、衣装と所作を伴い、ト書きを考慮した舞
台形式による上演も一興である。

結婚祝賀の機会作品のため《テーティとペレーオの結婚》は初演でお蔵入りとなり、自筆楽譜もある段階で行
方不明となったが、1966年にナポリのサン・ピエートロ・ア・マイエッラ音楽院図書館で発見され、1990年8
月8日、ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルで演奏会形式による復活演奏が行なわれた(会場：ア
ウディトリウム・ペドロッチェ。指揮：アルベルト・ゼッダ、チェーレ：マリエッラ・デヴィーア、ジョーヴェ：ルーカ・カ
ノーニチ)。ROFでは1992年8月に再演され、1998年6月23日にはバート・ヴィルトバートで初録音されてい
る(Hänssler Classic)。舞台形式による上演は2001年8月10日、ROFで行なわれた(会場：ヴィッラ・カプリレ。
演出：ピエル・ルイーダ・ピッツィ、指揮：ジュリアーノ・カレッラ、チェーレ：パトリツィア・チョーフィ、ジョーヴェ・
ロックウェル・ブレイク、ジュノーネ：エヴァ・ポードレスほか)。日本初演は2008年11月21日、Bunkamura オー
チャードホールにて、来日したロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルによってなされた(アルベルト・ゼッダ指揮ボルツァーノ・トレント・ハイドン管弦楽団、チェーレ：パオラ・アントヌッ
チほか)。

推薦ディスク リッカルド・シャイー指揮 チェチーリア・バルトリ、フアン・ディエゴ・フローレス
ほか(1998年録音 Decca)



2001年8月ヴィツラ・カブリーレにおける野外
舞台上演のカーテンコール(筆者撮影)



-
- ¹ 本稿の解説は全集版 II/3: *Le nozze di Teti, e di Peleo.*, Fondazione Rossini, Pesaro, 1993. の序文 (Guido Johannes Joerg)、フィリップ・ゴセットによる CD 解説 (下記)、ロッシーニ『書簡とドキュメント』第 1 巻と第 3 巻 a (下記) に基づく。
 - ² Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro Fondazione Rossini, 2004., p.131. [書簡 IIIa.71]
 - ³ 費用の明細は、Gioachino Rossini, *Lettere e documenti., vol.I., 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1811.*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni, Pesaro, Fondazione Rossini, 1992., pp.159-161, 165-168. [書簡 76 及び 79] を参照されたい。
 - ⁴ フィリップ・ゴセットによるライナーノーツにおける引用 (Decca 466328-2)。
 - ⁵ 詳しくは拙稿「〈もう逆らうのをやめろ〉ロジーナ用のヴァージョン」(『ロッシニアーナ』第 20 号 pp.38-42.) を参照されたい。
 - ⁶ 全集版序文 p.XXXV. の二つの表の内容を要約して合成。